

# 大学生の同調的衣類選択行動についての調査研究

## Investigation on Conformity Behavior of Clothes Selection in University Students

岡林 誠士

Satoshi Okabayashi

### 要旨

近年、自由に被服を選択することが可能である時期の大学生において、同じような服を着た学生が散見されている。そういった大学生の被服選択においてみられる同調的な被服選択について、その行動が示すもの、その背景は何かを明らかにすることを目的とし、関連する複数の心理測定尺度を用いての質問紙調査を都内2大学の大学生387名を対象に実施した。また、被服のジャンルを選択する質問を用いることで、同調における個人の特性や志向とは異なる要因を持つ可能性のある実際に行われた被服選択を検討した。その結果、行動志向とは異なる傾向が示唆され、また、複数の尺度では有意な差は見られなかったが、ユニークさ尺度(宮下, 1991)の「自己を積極的に表出するか否か」、他者意識尺度(辻, 1987)において、同調的被服選択行動と非同調的被服選択行動の間で有意な差が見られた。本調査からは、同調的被服選択行動が示すものは、自己の表出は消極的でありたい傾向と他者への関心の弱さを反映したものであると考えられた。今後、本調査で不十分であった衣服と密接な関係を持つ社会的環境との関係、実験的研究を含め、更なる検討を行なっていきたい。

●キーワード：同調行動 (conformity behavior) / 被服選択 (clothes selection) / 心理尺度 (psychological scale)

### I. はじめに

大学生における被服選択は、多くの者にとって、それまでの中学・高校時代とは異なり、自由に被服を選択することが可能となる時期である。また、大学卒業後の社会人における被服選択は、多くの者にとって、私的場面に限られた時間的制約の多いものとなる。つまり、大学生の被服選択は、金銭的制約はあるが、ライフステージの中で最も自由に衣服を選択できる期間の一つであると考えられる。しかし、近年、大学生における被服選択には、例えば、「量産型女子大生」や「かぶり男子」といった他者と同じ衣服・同じ系統の衣服を選択するという傾向が見られる。これらは、自由に嗜好や流行を取り入れるという選択ではなく、他者と大きく異なることを重視した同調的な選択であるとも考えられる。

同調的な行動についての研究は、同調行動の有名な研究である Asch(1951) の行なった集団圧力によって行動が変化するという実験研究<sup>1)</sup> 以後、現在でも多くの研究がなされ、その領域は心理学に限らず経済学はもちろんのこと、Kyrlitsias, & Michael(2016) らの VR での検討<sup>2)</sup> など多岐に渡っている。これらの場合の同調行動とは、例えば、藤原(2006)は、自分とは異なる意見・

態度・行動を周囲から求められたとき、迷いながらも周りの意見・態度・行動に合わせてしまうメカニズム、と定義し、さらに、一般に、同調行動は内心から他者の意見や行動を受け入れる「内面的同調」と、表面的には同調しているようにみえるが内面では異なる「表面的同調」とに分けることができる、と述べている<sup>3)</sup>。この内面的・表面的同調について、青年期の交友関係における同調と心理的距離を検討した上野ら(1994)は、その群構成の一つに、内面的な心理的距離を取る一方で、行動的には同調的であろうとする群を設定している<sup>4)</sup>。

被服選択においては、視覚的情報を含有するという衣服の性質上、この「表面的同調」を容易かつ端的に他者に表現することができる。そのため、同調的な行動を検討する上で実際の被服行動選択は重要な要因になり得るものと考えられる。例えば、青年期の友人関係における同調行動と不安について検討した葛西・松本(2010)の作成した質問項目<sup>5)</sup>には、「親しい友だちと同じような恰好や行動がしたい」という格好についての項目や、同調行動志向尺度を作成した藤原(2006)の質問項目<sup>3)</sup>には、「友だちが、ブランド品や流行の商品などを持っていると、自分もほしくなる」という衣服に関する項目を

設定している。しかし、これらの質問項目では、実際に衣服が同調しているかどうかの測定は困難である。そこで、本研究では、友人間における被服選択として実際に同調的であるかを、被服のジャンルを選択する質問を用いることで測定し、同調における個人の特性や志向とは異なる要因を持つ可能性のある実際に行われた被服選択を検討する。

一方、同調行動の要因としては、個人の様々な特性と共に検討がなされている。例えば、本田ら(2013)は対人恐怖<sup>6)</sup>と、田島ら(2015)は対人欲求<sup>7)</sup>と、五十嵐ら(2014)は文化的自己観<sup>8)</sup>と、上野ら(1994)は自意識<sup>4)</sup>と、といった特性と共に検討がなされている。特に、自意識との関連においては、公的自意識の高い者は同調しやすく、私的自意識の高い者は同調しにくいという傾向が、Froming & Carver(1981)の実験<sup>9)</sup>にて報告されている。また、葛西・松本(2010)の研究<sup>5)</sup>においても、仲間への同調と公的自意識との間には比較的強い関係を見出している。そのため、本研究においても自意識との関連を改めて検討する。その理由として、被服選択行動は、先述の通り、「表面的同調」を容易かつ端的に他者に表現することができるものであるが、大学生という比較的自由な友人関係の構築が可能な環境、および、被服選択においても制服といった制約がない環境においては、同調行動の有力な規定因である同調圧力の影響は少ないと考えられること、また、そのような環境の中でも、実際に同調的な被服選択行動が発現している場合には、表面的同調という一側面だけではない可能性が高いと考えられるためである。そのため、改めて同調的被服選択行動との関連も検討を要すると考えられる。また、同様に Snyder & Fromkin(1977) が示した反同調性に関連すると報告<sup>10)</sup>されている独自性欲求についても測定し、その同異を検討する。加えて、神山(1996)は、被服は本人の意図する他者に限らず、周囲にも情報を提供する非意図的情報伝達の効果を持つと述べており<sup>11)</sup>、最も身近な他者である家族との関係、社会との関係、他者への関心といった探索的な検討も加えることとした。以上、同調的被服選択行動との関連が考えられる自己意識と独自性欲求、さらに、親子関係と自分と社会との関係、他者への意識について多角的に検討することを二つ目の目的とする。

## II. 方法

### 1. 調査対象

関東圏の服飾系私立大学の大学生 230 名、文系私立大

学の大学生 157 名から回答を得た。回答意欲および質問の読解力への質問項目の回答から、有効回答者は以下とした。服飾系私立大学の大学生 127 名(男性 14 名、女性 113 名、平均年齢 19.06 歳 ( $n=127$ ,  $SD=1.11$ ,  $Range$ : 18.0-26.0)、文系私立大学の大学生 144 名(男性 62 名、女性 82 名、平均年齢 19.47 歳 ( $n=144$ ,  $SD=0.92$ ,  $Range$ : 18.0-23.0)であった。

### 2. 調査時期・手続き

2015 年 7 月および 2016 年 1 月に集合法による質問紙調査を実施した。調査は匿名であり、調査協力者には事前に本調査により不利益が生じないことや拒否権があることについて説明を行ない、倫理面に配慮した。回答所要時間は 2015 年 7 月の調査(服飾系)では卒業論文の一貫として収集された 4 名 4 部の調査に含まれる形で実施され、1 部あたり 15 分が指定され、2016 年 1 月の調査(文系)では 1 部の質問紙によって 15 分から 20 分を指定した。

### 3. 調査内容

#### (1) フェイスシート

性別・年齢について回答を求めた。

#### (2) 同調的被服選択行動

同調的被服選択行動について、全 23 項目(その他を回答した場合、自由記述を行なうことができる空欄を設けた)の選択肢の中から自身の服装に該当すると思うものを 1 つ選択させ、回答を求めた。次に、同種・同数の選択肢の中から友達の服装に該当すると思うものを一つ選択させ、回答を求めた(尚、友達の範囲や人数等の説明は行なわず、各自がその単語から思い浮かべる個人(または集団)を対象とした)。全 23 項目は、1: 裏原系・2: ストリート系・3: 森ガール系・4: 姫ギャル系・5: ロック系・6: モード系・7: フェミニン系・8: セレカジ系・9: ロリータ系・10: コンサバ系・11: ギャル系・12: キレカジ系・13: ガーリッシュ系・14: きれい系・15: お姉さん系・16: お嬢様系・17: お姉ギャル系・18: B ガール系・19: アメカジ系・20: お兄さん系・21: サロン系・22: カジュアル系・23: その他(自由記述回答欄)、とした。

#### (3) 同調行動志向尺度

藤原(2006)が作成した同調行動志向尺度<sup>3)</sup>を用いた。「友達関係」「学校・流行」「家族関係」の 3 因子 14 項目で構成されている。回答は、自身にあてはまるものにつ

いて、「あてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「あてはまる」の5件法で求めた（以下(4)～(8)の尺度は全て同様に5件法で回答を求めた。

(4) 自意識尺度

菅原(1984)が作成した自意識尺度<sup>12)</sup>を用いた。「公的自意識」「私的自意識」の2因子21項目で構成されている。

(5) ユニークさ尺度

宮下(1991)が作成したユニークさ尺度<sup>13)</sup>を用いた。「他者の存在を気にするか否か」「自己を積極的に表出するか否か」の2因子16項目で構成されている。

(6) 親—青年関係尺度

小高(1998)が作成した105項目<sup>14)</sup>から、山本ら(2008)が採用した25項目<sup>15)</sup>のうち、結果で示された「親との情愛的絆」「親からのポジティブな影響」「親との対立」「親への服従」「一人の人間として親を認知する」の5因子構造を持った23項目を使用した。

(7) 行動基準尺度

菅原ら(2006)が作成した行動基準尺度<sup>16)</sup>のうち、「公共利益」「自分本位」「他者配慮」の3因子15項目を用いた。

(8) 他者意識尺度

辻(1987)が作成した他者意識尺度(第1版)<sup>17)</sup>のうち、「他者の内面への関心」「外面への関心」の2因子8項目を用いた。

(9) その他

回答意欲および質問の読解力を測定するための項目と数字を選択する質問項目(例:「2を選んでください」)を上記質問の中に4項目設けた。本4項目の回答が間違っている場合には、回答意欲および質問の読解力がないものをみなして分析から除外した。

#### 4. 結果の処理方法

データは統計的に集計し、分析を行なった。統計処理にはSPSS Statistics 21 (IBM)を用いた。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 同調的・非同調的被服選択行動の有無とジャンル

被服選択において同調的であった者は、141名(52%)、非同調的であった者は130名(48%)で、同調的・非同調的被服選択行動の有無はほぼ半々という結果であった。その内訳はTable 1の通りであった。

Table 1 同調的・非同調的被服選択行動のジャンル別人数

		同調的・非同調的		
		被服選択の有無		
ジャンル		同調的		非同調的
		自分/友人	自分	友人
22	カジュアル系	94	32	30
14	きれい系	7	15	23
7	フェミニン系	6	10	3
12	キレカジ系	5	2	5
6	モード系	4	13	8
23	その他	4	3	4
1	裏原系	3	7	8
2	ストリート系	3	10	12
10	コンサバ系	3	0	1
20	お兄さん系	3	0	3
15	お姉さん系	2	6	14
13	ガーリッシュ系	1	5	3
19	アメカジ系	1	5	5
3	森ガール系	0	4	2
4	姫ギャル系	0	0	1
5	ロック系	0	3	2
8	セレカジ系	0	0	0
9	ロリータ系	0	3	0
11	ギャル系	0	2	3
16	お嬢様系	0	2	0
17	お姉ギャル系	0	3	0
18	Bガール系	0	1	0
21	サロン系	0	1	0
複数選択肢回答者		5	3	3
合計		141	130	130

選択されたジャンルの傾向については、同調的・非同調的被服選択行動を行なう者においては、67%が「カジュアル系」を選択し、非同調的・被服選択行動を行なう者においても自分では25%、友人では23%と最も多く選択されていた。また、選択されたジャンル数では、同調的である者では13ジャンル、非同調的である者では22ジャンルであった。一方、全く選択されなかったジャンルは「サロン系」であり、その他での回答では、ダサイ系、トレッド系、女子大生系などの回答があり、(ジャンルが)分からないとの回答も2名からあった。

また、今回は専門性の異なる2大学でデータを得たことから、被服選択行動の違いの人数を、各大学および男女別で示した(Table 2)。

カイ二乗検定の結果、被服選択行動において「大学」と「男女」の組み合わせにおいて有意な連関が見られた( $\chi^2=20.83$ ,  $df=3$ ,  $p<.01$ )。そこで、残差分析を行なった結果、「服飾系の女性」では非同調的・被服選択行動が有意に多く、また「文学部系の男性」は同調的・被服選択行動が有意に多かった(Table 2)。

Table 2 同調的・非同調的被服選択行動の大学 / 男女別の人数

大学		同調的	非同調的	合計	
服飾系	男	9	5	14	
	調整済み残差	0.94	-0.94		<i>n.s.</i>
	女	44	69	113	
	調整済み残差	-3.65	3.65		**
文学部系	男	46	16	62	
	調整済み残差	3.98	-3.98		**
	女	42	40	82	
	調整済み残差	-0.18	0.18		<i>n.s.</i>
合計		141	130	271	

\*\* $p < .01$ 

## 2. 同調行動志向性との関連

藤原 (2006) の同調行動志向尺度<sup>3)</sup> は小学 5 年当時を回想して回答させた項目であったことから、再度因子構造の確認を行なった。全 14 項目について、因子分析 (最尤法, Promax 回転) を行なったが、下位尺度において十分な信頼性を示す結果が得られなかった。そこで、本尺度の中で被服選択に関わりがあると考えられる 2 項目 (「C08\_ 友達がブランド品・流行の商品など持っている、自分も欲しくなる」「C09\_ 話題になっている TV や漫画・小説などは、見たり読んだりする」) を用いて、同調的被服選択行動の有無で比較した結果を示した (Table 3)。その結果、C08 では有意差が見られた ( $t = 2.17, df = 269, p < .05$ ) が、C09 では有意な差は見られなかった。

Table 3 同調的被服選択行動の有無による同調行動志向性尺度の 2 項目の得点

質問項目	同調的		非同調的		
	M	SD	M	SD	
C08_ 友達がブランド品・流行の商品など持っている、自分も欲しくなる	2.20	1.18	2.54	1.39	**
C09_ 話題になっている TV や漫画・小説などは、見たり読んだりする	2.72	1.20	2.75	1.23	<i>n.s.</i>

Table 4 同調的被服選択行動の有無による自意識尺度の各因子得点

尺度	N	同調的		非同調的			
		平均値	SD	平均値	SD		
公的自意識	141	39.77	7.03	130	40.19	6.65	<i>n.s.</i>
私的自意識	141	34.34	6.53	128	34.52	6.06	<i>n.s.</i>

Table 5 同調的被服選択行動の有無によるユニークさ尺度の各因子得点

尺度	N	同調的		非同調的		F値		
		平均値	SD	平均値	SD			
他者の存在を気にするか否か	141	19.18	5.49	130	18.78	6.08	0.31	<i>n.s.</i>
自己を積極的に表出するか否か	140	10.71	3.21	130	12.11	3.32	12.28	**

## 3. 自意識および独自性欲求との関連

自意識尺度の 21 項目およびユニークさ尺度の 16 項目について、再度、因子構造の確認を行なった。因子分析 (最尤法, Promax 回転) を行ない、スクリー法と累積寄与率および解釈可能性から、因子負荷量の基準を  $|.35|$  以上とし、どの因子においても基準値を満たさない項目を削除した (自意識尺度では「気分が変わると自分自身でそれを敏感に感じ取るほうだ」の 1 項目、ユニークさ尺度では「他人が自分に反対すると嫌な気持ちになる」「人から「生意気だ」とか「うぬぼれている」といわれたことがある」「型にはまったことをするより変わったことをしたい」の 3 項目) と、共に先行研究と同じ因子構造が得られた (添付資料 1, 2)。各尺度の信頼性を示すクロンバックの  $\alpha$  係数は、自意識尺度の「公的自意識」が .789, 「私的自意識」が .846, ユニークさ尺度の「他者の存在を気にするか否か」が .805, 「自己を積極的に表出するか否か」が .726 であり、内的整合性はおおむね確認されたと考えられる。この結果と先行研究に基づき、因子ごとにその因子に含まれる項目の回答得点を加算し、それぞれの尺度得点とした。

自意識尺度の各因子得点を同調的被服選択行動の有無で比較した結果、有意な差は見られなかった (Table 4)。

ユニークさ尺度の各因子得点を同調的被服選択行動の有無で比較した結果、「他者の存在を気にするか否か」では有意な差は見られなかった (Table 5) が、「自己を積極的に表出するか否か」では有意な差が見られ、同調



Table 6 独自性欲求の4つの類型と被服選択行動の有無（人数）

類型	同調的	非同調的
わが道型	47	42
抑圧型	32	20
自己顕示型	32	37
自己中心型	30	31
合計	141	130

Table 7 同調的被服選択行動の有無による親—青年関係尺度の各因子得点

尺度	同調的			非同調的			
	N	平均値	SD	N	平均値	SD	
親との情愛的絆	141	21.96	3.90	130	22.28	4.20	n.s.
親からのポジティブな影響	141	17.94	4.82	130	18.39	4.78	n.s.
親との対立	141	13.72	4.37	130	13.37	4.54	n.s.
親への服従	141	9.11	3.50	130	8.99	3.72	n.s.
一人の人間として親を認知する	141	15.35	3.04	130	15.41	3.24	n.s.

Table 8 同調的被服選択行動の有無による行動基準尺度の各因子得点

尺度	同調的			非同調的			
	N	平均値	SD	N	平均値	SD	
自分本位	141	10.88	3.89	130	11.38	3.89	n.s.
他者配慮	141	19.33	3.02	130	19.62	3.18	n.s.
公共価値	141	15.94	2.18	130	16.15	2.55	n.s.

的被服選択群は非同調的被服選択群よりも、自己を積極的に表出しないことが示された。ユニークさ尺度においては、2つの因子得点の高低から独自性欲求の4つの類型に分類し、同調的被服選択行動の有無で集計した (Table 6)。その結果、有意な差は見られなかったが、人数が多かったのは、わが道型の同調的被服選択行動群、自己顕示型の非同調的被服選択行動群で、人数が少なかったのは抑圧型の非同調的被服選択行動群であった。

#### 4. 親子関係および自分と社会との関連

親—青年関係尺度の23項目および行動基準尺度の15項目について、再度、因子構造の確認を行なった。因子分析（主因子法、Varimax回転）を行ない、スクリー法と累積寄与率および解釈可能性から、因子負荷量の基準を  $|.35|$  以上とし、どの因子においても基準値を満たさない項目を削除した（親—青年関係尺度、行動基準尺度の共に削除項目はなかった）ところ、共に先行研究と同じ因子構造が得られた（添付資料3, 4）。各尺度の信頼性を示すクロンバックの $\alpha$ 係数は、親—青年関係尺度の「親との情愛的絆」が.940、「親からのポジティブ

な影響」が.845、「親との対立」が.778、「親への服従」が.832、「一人の人間として親を認知する」が.731、行動基準尺度の「公共価値」が.683、「自分本位」が.725、「他者配慮」が.690であり、内的整合性はおおむね確認されたと考えられる。この結果と先行研究に基づき、因子ごとにその因子に含まれる項目の回答得点を加算し、それぞれの尺度得点とした。親—青年関係尺度と行動基準尺度の各因子得点を同調的被服選択行動の有無で比較した結果、有意な差は見られなかった (Table 7, Table 8)。

#### 5. 他者意識

他者意識尺度の8項目については項目数が少ないことから、各尺度の信頼性を示すクロンバックの $\alpha$ 係数を確認し、分析に用いることとした。「他者の内面への関心」が.789、「外面への関心」が.506であり、「外面への関心」の内的整合性は若干低い、服装に関する質問項目を含むため、今回はそのまま用いることとした。尺度得点は、因子ごとにその因子に含まれる項目の回答得点を加算し、それぞれの尺度得点とした。他者意識尺度の各因子得点を同調的被服選択行動の有無で比較した結果、有意な差が見られた (Table 9)。「他者の内面への関心

Table 9 同調的被服選択行動の有無による他者意識尺度の各因子得点

尺度	N	同調的		N	非同調的		F値	
		平均値	SD		平均値	SD		
外面因子	140	12.66	2.75	130	13.76	3.02	9.87	**
内面因子	140	13.75	3.57	130	14.62	3.27	4.29	**

(内面因子)」「外面への関心(外面因子)」の共に非同調的被服選択行動群の得点が高いという結果であり、同調的被服選択行動群よりも、内面や外面への意識が高いということを示した。

#### IV. 考察

##### 1. 同調的被服選択行動の有無とジャンル

被服選択行動として、同調的か非同調的の人数がほぼ半々であったことから、大きな偏りのある質問内容ではないことが示唆された。一方、その選択肢のジャンル数は非同調的被服選択行動においてほぼ全ての選択肢が選ばれていたが、同調的被服選択行動においては、その多くが10ジャンル以内にあり、上位4ジャンルとその他の選択肢でも十分に同調的被服選択行動の有無を尋ねることは可能であると考えられる。

また、今回2つの大学間で調査を実施したこと、大学と男女の連関から被服選択行動を確認したところ、違いが見られた。服飾系大学では女性で非同調的被服選択行動が、文学部系大学では男性で同調的被服選択行動が多かった。ただし、服飾系大学では女性率が極めて高く、男性の数が極めて少ないことには注意が必要だが、本結果は、先述した「量産型女子大生」や、他にも「ニコイチ」「双子コーデ」など、女性を対象とした現象が多く見受けられる同調的被服選択行動の世相とは異なるものであると考えられる。つまり、女性において同調的衣類選択行動が多く見られると推測していたが、実際にはそうではないという結果となっていた(文学部系大学でも女性では被服選択行動に差は見られなかった)。近年では、インターネットにおいて、視覚的情報の共有である写真を個人が即時的にアップロードし、情報を他者と共有することができる。まさにその写真の中では衣服も情報として共有されるものとなる。つまり、服飾系の学生は衣服への関心が高い故に、流行の情報にいち早く接し、他者と同じ衣服・同じ系統の衣服を選択することが「ダサイ」ものであると捉え、被服選択行動に影響を及ぼしたのではないだろうか。さらに、それは文学部系と一般大学の女子大生にも拡がりを見せている可

能性が示唆される。他方、服飾系大学では、衣服に関心の高い学生が集まっていることにより、その集団内で自身を差別化するため、他者から差別化が賞賛される環境にあるといった特別な要因も推測されるため、今後更なる検討を要するだろう。また、文学部系大学では男性で同調的被服選択行動が多かった点については、先述した「かぶり男子」の傾向を示唆する結果ではないかと考えられる。

##### 2. 同調行動志向性との関連

本調査では、同調行動志向性尺度の下位尺度で十分な結果が得られなかったため、関係する2つの質問項目のみを用いて検討した。その結果、「友達がブランド品・流行の商品など持っている、自分も欲しくなる」というファッションに関する同調性を問う項目では非同調的選択行動を行なうものの方が、同調的選択行動を行なうものよりも得点が高かった。通常、被服選択行動が同調的なものの方が他者と同じものを持ちたがる、と考えられそうではあるが、ブランド品や流行といった「その他大勢」とも同じになる可能性の高いこのようなアイテムでは、むしろ逆の傾向を好むと考えられる。一方で、「話題になっているTVや漫画・小説などは、見たり読んだりする」という生活の嗜好的側面での同調を問う質問においては、同調的被服選択行動との関係が見られなかったが、この項目では「話題になっている」と大勢との同調を問う内容であった点も先の考察と併せて考えると、今後その影響を検討する必要がある内容であるだろう。

##### 3. 自意識および独自性欲求との関連

同調的被服選択行動と自意識尺度との間には、本調査では関連が見いだされなかった。今回、公的自意識、自意識の共に被服選択行動による差はみられなかったことから、同調的な被服選択行動は自意識には依らない、もしくは、同調的な被服選択行動は自意識を反映しないと考えられる。自意識尺度は、自分自身にどの程度注意を向けやすいかの個人の特性を示すものである。自分自身

への注意によって、同調的か非同調的かの被服選択行動は発現しないと示唆されるだろう。

一方、ユニークさ尺度においては、「他者の存在を気にするか否か」では有意な差は見られなかったが、「自己を積極的に表出するか否か」では有意な差が見られ、同調的被服選択群は非同調的被服選択群よりも、自己を積極的に表出しないことが示された。この結果は、同調という他者の存在が必須（当たり前ではあるが、一人では同調はできない）の事象にも関わらず、他者の存在を気にする故に発現した行動ではなく、自己を表出しないために同調的被服選択行動が発現したことを示唆する結果である。前述の通り、近年みられる「量産型女子大生」や「かぶり男子」といった他者と同じ衣服・同じ系統の衣服を選択するという傾向は、他者と大きく異なることを重視した消極的な同調という選択の結果であると考えられるものであった。

また、独自性欲求における4つの類型と被服選択行動の有無については、わが道型の同調的被服選択行動群、わが道型の非同調的被服選択行動群が共に多く、現代の大学生における他者への関心の希薄さを示唆するものではないだろうか。一方、抑圧型の非同調的被服選択行動群は、被服選択行動における非同調という表面的な非同調を表現するものであり、抑圧とは矛盾するものであると考えることができることから、その人数が最も少ないことは妥当であると考えられる。

#### 4. 親子関係および自分と社会との関連

同調的被服選択行動と親—青年関係および「公共利益」「自分本位」「他者配慮」といった行動基準との間には、本調査では関連が見いだされなかった。最も身近な他者は親であるが、大学生においては自由な時間が増えることや居住形態（一人暮らしや上京）なども含め、親子関係よりも友人関係が密接であり、また本調査では自身と友人との被服選択行動についての質問であったことから、関連が見出されなかったものと考えられる。

行動基準において、公共利益や他者配慮といった社会・他者への注意は、これまでの考察と同様にその関連が見られなかったことは一貫性を持つものである。一方、自分本位も自分を集団の中で強調することに繋がる行動（「法律に違反さえしなければ、あとは個人の自由だ」や「何をしようが自分の勝手だと思う」等）であり、前述の消極的な同調とは逆の傾向を持つことから、関連が見出されなかった点は妥当なものであると考えら

Table 10 同調的被服選択行動の有無と各因子

	同調的	非同調的
公的自意識	n.s.	
私的自意識	n.s.	
他者の存在を気にするか否か	n.s.	
自己を積極的に表出するか否か	<	**
親との情愛的絆	n.s.	
親からのポジティブな影響	n.s.	
親との対立	n.s.	
親への服従	n.s.	
一人の人間として親を認知する	n.s.	
自分本位	n.s.	
他者配慮	n.s.	
公共価値	n.s.	
外面への関心	<	**
他者の内面への関心	<	**

れる。

#### 5. 他者意識との関連

同調的被服選択行動と他者意識との間には、何らかの関係が示唆される結果であった。そして、「他者の内面への関心」と「外面への関心」の共に非同調的被服選択行動群の得点が高いという結果であったことから、非同調的被服選択行動を行なうものは他者への関心が強い、もしくは、同調的被服選択行動を行なうものは他者への関心が少ないということが考えられる。独自性欲求の類型ではわが道型が多い傾向が示されていたことと共に考察すると、後者の考察が妥当ではないかと考えられる。

#### 6. 総合考察

本研究では、大学生における同調的被服選択行動が示すものは何であるのか、その背景は何かを明らかにすることを目的とし、質問紙調査を実施した。同調的・非同調的被服選択行動と今回の調査で使用した尺度の結果を、多角的検討の論点の整理のために改めて一覧で示す（Table 10）。

Table 10 および各考察の要点をまとめると、同調的被服選択行動が示すものは、「自意識の高低や社会への関心および養育環境ではなく、自己を積極的に表出しない傾向、すなわち自己の表出は消極的でありたい傾向、さらに、他者の存在ではなく、他者への関心の弱さ」、それらを反映したものであると考えられる。上野ら（1994）は、「友人との心理的距離を取りながら、行動的には同調的であろうとする」表面群を問題として取り上

げている<sup>4)</sup>が、現代の大学生においてもその傾向は示唆されたこととなる。なお、上野ら(1994)の研究<sup>4)</sup>が90年代中盤および高校生を対象としたものであり、その際に、彼らはそれを「群れ志向」と呼んでいた。現代における「量産型女子大生」や「かぶり男子」といった現象もまさにそれを示すものであるかもしれない。しかし一方で、90年代と現代では社会環境として大きな違いがある。その最たるものが、インターネットの普及であり、個人間での情報共有の簡便化・容易化、関係性のヴァーチャル化であり、その影響を考慮していくことも必要であろう。

同調的被服選択行動は、視覚的情報という意味ではその同調・非同調は意識的・無意識的であれ、他者に表現されるという強制的な側面を持つ一方、他者(および他者の衣服)に関心が示されない場合には全く意味をなさないという側面も持つ。しかし、社会的には、人は必ず衣服を着て集団内の他者と接していることから、被服行動における「実際の」同異はそういった二面性を含みつつも表現されているものであり、今後の研究において、衣服と密接な関係を持つ社会的環境、実験的研究を含め、更なる検討を行なっていきたい。

## 謝辞

本調査データの一部は、2015年度服装学部服装社会学コースゼミ卒業生(内山璃希・大沼里紗・小林莉菜・渋谷美咲)と取得したものである。また、平成27年度文化ファッション研究機構若手教員研究奨励金を使用して実施された内容を含むものである。この場をかりて御礼申し上げます。

## 引用文献

- 1) Asch, S. E. "Effects of group pressure upon the modification and distortion of judgments In H. Guetzkow (Ed.)" *Groups, leadership, and men*, Pittsburgh, PA: Carnegie Press, 1951. pp. 222-236.
- 2) Kyriltsias, C., & Michael, D. "Influence by others' opinions: social pressure from agents in immersive virtual

- environments" *Virtual Reality (VR)*, 2016 IEEE, 2016, pp. 213-214
- 3) 藤原正光「同調行動志向尺度・個人行動志向尺度作成の試み(1)―大学生による小5時代の回想から」『文教大学教育学部紀要』40, 2006, pp.1-9
  - 4) 上野行良, 上瀬由美子, 松井豊, & 福富護「青年期の交友関係における同調と心理的距離」『The Japanese Journal of Educational Psychology』42, 1, 1994, pp.21-28
  - 5) 葛西真記子, & 松本麻里「青年期の友人関係における同調行動: 同調行動尺度の作成」『鳴門教育大学研究紀要』25, 2010, pp.189-203
  - 6) 本田優子, 梶原まどか, 堀川ひかり, 森恵美加, & 一期崎直美「中学生がとる同調行動と対人恐怖心性との関連」『熊本大学教育学部紀要』62, 2006, pp.239-251
  - 7) 田島祐奈, 山崎洋史, & 岩瀧大樹「青年期における対人欲求および同調行動に関する研究」『學苑』892, 2015, pp.105-111
  - 8) 五十嵐透子, 野村珠紀, & 岩崎眞和「大学生の同調行動と文化的自己観および大学適応感との関連」『上越教育大学研究紀要』33, pp.107-114
  - 9) Froming, W. J., & Carver, C. S. "Divergent influences of private and public self-consciousness in a compliance paradigm" *Journal of Research in Personality*, 15, 2, 1981. pp. 159-171.
  - 10) Snyder, C. R., & Fromkin, H. L. "Abnormality as a positive characteristic: The development and validation of a scale measuring need for uniqueness" *Journal of Abnormal Psychology*, 86, 5, 1977, p.518
  - 11) 神山進, & 高木修『被服行動の社会心理学―装う人間のこころと行動(シリーズ 21世紀の社会心理学)』北大路書房, 1999, pp.44-53
  - 12) 菅原健介「自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み」『心理学研究』55, 3, 1984, pp.184-188
  - 13) 宮下一博「大学生の独自性欲求の類型化に関する研究」『教育心理学研究』39, 2, 1991, pp.214-218
  - 14) 小高恵「青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究」『教育心理学研究』46, 3, 1998, pp. 333-342
  - 15) 山本彩留子, & 岡本祐子「大学生の親に対する態度・行動とアイデンティティ, 対人態度の関連性」『広島大学心理学研究』8, 1998, pp.107-120
  - 16) 菅原健介, 永房典之, & 佐々木淳「青少年の迷惑行為と羞恥心―公共場面における5つの行動基準との関連性」『聖心女子大学論叢』107, 2006, pp.180-160
  - 17) 辻平治郎「自己意識と他者意識(1)」『日本教育心理学会総会発表論文集』29, 1987, pp.514-515



添付資料 1 自意識尺度（菅原，1984）の因子分析結果（最尤法，Promax 回転後の因子パターン）

項目内容	第1因子	第2因子
第1因子：「公的自意識」(α = .789)		
S01_自分が他人にどう思われているのか気になる	<b>.821</b>	.034
S17_他人からの評価を考えながら行動する	<b>.721</b>	.148
S06_自分の発言を他人がどう受け取ったのか気になる	<b>.678</b>	.258
S12_自分についての噂に関心がある	<b>.640</b>	.144
S13_人前で何かをする時、自分の仕草や姿が気になる	<b>.627</b>	.269
S04R_人に会うとき、どんなふう振る舞えば良いのか気になる	<b>-.616</b>	-.337
S21_人の目に映る自分の姿に心を配る	<b>.576</b>	.297
S19_初対面の人に、自分の印象を悪くしないように気遣う	<b>.563</b>	.097
S08_人に見られていると、つかっこうをつけてしまう	<b>.549</b>	.148
S02R_世間体など気にならない	<b>.527</b>	-.083
S09_自分の容姿を気にするほうだ	<b>.408</b>	.281
第2因子：「私的自意識」(α = .846)		
S11_ふと、一歩離れた所から自分をながめてみることもある	-.006	<b>.744</b>
S16_しばしば、自分の心を理解しようとする	.170	<b>.723</b>
S18_つねに、自分自身を見つめる目を忘れないようにしている	.066	<b>.664</b>
S10_自分が本当は何をしたいのか考えながら行動する	.049	<b>.613</b>
S15_他人を見るように自分をながめてみることもある	.053	<b>.590</b>
S05_その時々気持の動きを自分自身でつかんでいたい	.290	<b>.543</b>
S03_自分がどんな人間か自覚しようと努めている	.256	<b>.526</b>
S14_自分を反省してることが多い	.289	<b>.494</b>
S07R_自分自身の内面のことには、あまり関心がない	.372	<b>.436</b>
寄与率 (%)	4.69	3.70
累積寄与率 (%)	23.43	18.51
因子間相関		
第1因子	—	.576
第2因子		—

添付資料 2 ユニークさ尺度（宮下，1991）の因子分析結果（最尤法，Promax 回転後の因子パターン）

項目内容	第1因子	第2因子
第1因子：「他者の存在を気にするか否か」(α = .808)		
U02R_自分に対する評価が気になる	<b>.756</b>	.309
U04R_つつい他人と他人の評価をきにしてしまう	<b>.665</b>	.121
U16R_他の人に自分のことを認めてもらいたい	<b>.664</b>	-.082
U09_世間体はそれほど気にしない	<b>.628</b>	.245
U15R_自分の容姿を気にする方である	<b>.531</b>	-.124
U12R_ひとにみられるとつかっこうをつけてしまう	<b>.515</b>	-.058
U05R_誰からも嫌われたくない	<b>.499</b>	.076
U11_他人の行動に興味がない	<b>.485</b>	-.007
第2因子：「自己を積極的に表出するか否か」(α = .689)		
U10_いつでも積極的に自分の意見を述べる	.015	<b>.804</b>
U01R_引っ込み思案である	.161	<b>.657</b>
U06R_我を通すことはあまり好まない	.117	<b>.538</b>
U08_人の話を聞くより自分の話をしたい	-.168	<b>.432</b>
寄与率 (%)	2.95	1.76
累積寄与率 (%)	24.58	14.63
因子間相関		
第1因子	—	.440
第2因子		—

添付資料 3 親—青年関係尺度 (小高, 1998) の因子分析結果 (最尤法, Promax 回転後の因子パターン)

項目内容	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
第1因子: 「親との情愛的絆」(α = .940)					
P05_親に対して感謝の気持ちを持っている	<b>.916</b>	.508	.067	-.324	-.126
P04_親に対していたわってあげたい	<b>.900</b>	.520	.019	-.210	-.085
P03_最近親のありがたみを感じることもある	<b>.885</b>	.503	-.062	-.264	-.100
P01_親に対して、これからは親孝行したい	<b>.857</b>	.432	.006	-.316	-.103
P02_自分が今安心して生活できるのは親の存在があるからだ	<b>.797</b>	.431	-.010	-.277	-.119
第2因子: 「親からのポジティブな影響」(α = .845)					
P07_親によって自分の視野が広がった	.508	<b>.887</b>	.094	-.254	-.081
P06_親によって人生観が深められた	.457	<b>.878</b>	.065	-.233	-.100
P09_親は生き方の1つのモデルを私に示してくれたと思う	.423	<b>.639</b>	.018	-.257	-.008
P10_私が何かを決める際、親の意見は十分参考になると思う	.574	<b>.622</b>	.211	-.297	-.172
P08_自分の価値観には、親の価値観が影響している	.228	<b>.541</b>	.155	-.124	-.088
第3因子: 「親への服従」(α = .832)					
P17_親の言うことにはいつも従っている	.063	.130	<b>.845</b>	-.071	-.151
P18_私は親の言うとおりに生きている	-.028	.030	<b>.786</b>	.057	.009
P16_親に逆らえないで言うとおりになってしまうやすい	-.065	.044	<b>.716</b>	.043	-.068
P19_自分の意見と親の意見が違うとき、親の意見に左右されやすい	.110	.214	<b>.643</b>	.009	-.214
第4因子: 「親との対立」(α = .778)					
P14_私の意見や考え方が親に伝わらず、イライラすることが多い	-.335	-.365	.069	<b>.768</b>	.188
P11_私と親の言うこととはいつも対立する	-.310	-.227	-.093	<b>.680</b>	.089
P13_自分の進路、生き方などのことで親と対立することがある	-.219	-.200	.067	<b>.676</b>	.080
P12_親を理解しようと思うのだがつい反抗し喧嘩になることが多い	-.012	-.031	.012	<b>.632</b>	-.062
P15_親の価値観に疑問を持っている	-.470	-.442	.048	<b>.507</b>	.301
第5因子: 「一人の人間として親を認知する」(α = .731)					
P21_親の事を一人の人間として客観的に見ている	-.166	-.122	-.077	.061	<b>.850</b>
P22_親も一人の人間だと思って接している	-.051	-.014	-.088	-.037	<b>.741</b>
P20_やっぱり親も一人の人間だと思うようになった	.088	.051	-.053	.090	<b>.573</b>
P23_自分の生き方は親の生き方とは独自のものだ	-.059	-.183	-.247	.196	<b>.392</b>
因子寄与	5.89	2.49	1.49	1.75	1.68
寄与率 (%)	25.61	10.84	6.48	7.62	7.32
因子間相関	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
第1因子	—	.572	.015	-.336	-.149
第2因子		—	.124	-.331	-.152
第3因子			—	.009	-.127
第4因子				—	.141
第5因子					—

添付資料 4 行動基準尺度 (菅原, 2006) の因子分析結果 (最尤法, Promax 回転後の因子パターン)

項目内容	第1因子	第2因子	第3因子
第1因子: 「自分本位」(α = .725)			
B08_悪いことをしても、バシなればよい	<b>.705</b>	-.191	-.278
B06_人に怒られなければ何をしてもよいと思う	<b>.695</b>	-.191	-.126
B07_法律に違反さえしなければ、あとは個人の自由だ	<b>.678</b>	-.080	-.030
B09_何をしようが自分の勝手だと思う	<b>.477</b>	-.241	-.020
B10_お金さえはらえば何をしても許される	<b>.404</b>	-.150	-.212
第2因子: 「他者配慮」(α = .690)			
B13_人に迷惑になるかどうかを、まず第一に考えて行動すべき	-.080	<b>.721</b>	.167
B12_自分が誰かの迷惑になっていないか常に気を遣う	-.196	<b>.598</b>	.212
B11_他人に迷惑がかかりそうなら身勝手な行動は慎む	-.128	<b>.545</b>	.243
B15_大勢の人がいる場所ではお互い同士もっと気を遣うべき	-.189	<b>.434</b>	.206
B14_見知らぬ人に対してでも相手の立場になって考える	-.176	<b>.415</b>	.317
B05_みんなで話し合っって決めたことは守らなければならない	-.267	<b>.402</b>	.300
第3因子: 「公共利益」(α = .683)			
B04_多数の人の意見だけでなく、少数の意見にも耳を傾ける	-.070	.195	<b>.648</b>
B02_なるべく多くの人の立場を考えて行動する	-.079	.246	<b>.617</b>
B01_仲間と考えが違ったりしても、それぞれの意見を大切にす	-.153	.220	<b>.599</b>
B03_どんな人に対してでも人権を尊重する	-.221	.290	<b>.544</b>
因子寄与	2.77	1.46	0.98
寄与率 (%)	18.49	9.72	6.52
因子間相関	第1因子	第2因子	第3因子
第1因子	—	-.269	-.227
第2因子		—	.372
第3因子			—